

翻訳

蒋 永 国
百年日本魯迅研究の時空再構築

鄭 高 咏 (訳)

解題

本稿は蒋永国氏「百年日本魯迅研究の時空重構」(『中国文化研究』第3期, 2020年8月)の翻訳であり、併せて同氏の著書『日本魯迅学史論綱』(生活・読書・新知三聯書店, 2025年版)の緒論にも位置づけられる。本論文は、日本の魯迅研究の展開を戦前・戦後を貫く時間的・空間的視点から史実に基づいて再構成し、京都学派・東京派の学術的影響、研究者の地域的分布、世代的推移を整理することで、日本の魯迅研究が日本中国学史において果たした学術的意義を明らかにしている。翻訳に際しては、日本語文献の引用を可能な限り原典に拠り、参照頁は訳注に示した。翻訳の公刊をご快諾くださった蒋永国教授、ならびに日本語表現に助言を賜った湯浅健司氏にここに記して深謝する。本訳文が日本の魯迅研究の百年の歩みを学術的文脈の中に位置づけ、今後の研究の一助となれば幸いである。

* * *

要 旨

1944年に刊行された竹内好の著書『魯迅』を境として、百年にわたる日本の魯迅研究は戦前と戦後という時間区分によって大きく二分され、その決定的な転換点は的確に捉えられてきた。しかしながら、それだけでは一世紀に及ぶ日本の魯迅研究の変遷過程や空間的展開を精緻に描き出すことはできない。本研究は百年にわたる日本の魯迅研究を歴史的事実に基づく時空的再構築の視座から捉え直すことを目的とする。そのうえで、時間の縦軸において研究の盛衰の軌跡を明らかにし、空間的広がりにおいては京都学派と東京派という二大学派の思想的影響を検討する。このような時空的再構築を通じて、百年間にわたる日本の魯迅研究の一貫した縦軸と多元的な横軸を明確化し、両大学派の影響を体系的に整理する

ことによって、日本の魯迅研究の全体像を浮き彫りにするとともに、中国学史におけるその学術的価値を再確認することを目指す。

キーワード：日本、魯迅研究、時空再構築

藤井省三の研究によれば、1909年にはすでに日本において周氏兄弟の紹介が始まっていたが、作家としての魯迅が日本に紹介されたのは1920年、青木正児によってであった。どの時点を起点にしても、日本魯迅研究はすでに百年の歴史を有している。日本の研究者たちは魯迅研究に強い関心を示し、その歴史の変遷と思想的脈絡について体系的な整理を行ってきた。その展開は時間的には戦前と戦後に大別され、内容的には思想史的な現代的再認識を特徴としている。中国の研究者たちは日本の魯迅研究を時間的に区分する視点を評価し、さらに思想史的観点からの戦後日本魯迅研究にも重点を置いている。“史”の視点から百年にわたる日本魯迅研究を考察すると、日中双方の学界における関連研究には、全体像を通じた多面的な一貫性が明らかに欠けている。戦前と戦後という区分は一定の示唆を与えるものの、日本近現代の歴史過程における魯迅研究の盛衰を精緻に再現することはできない。同時に、百年にわたる日本の魯迅研究は空間的な視点を欠いている。戦前には特殊な歴史的背景の下で、本土と中国という空間に分類されていたが、戦後に出現した三つの研究中心や日本近代以来の“東京派”と京都学派の地域的分布とも関連していると考えられる。そのため、百年にわたる日本魯迅研究において、時間的・空間的展開を考慮しつつ研究史を再構築することが求められる。これにより、日本魯迅研究の一貫した縦軸と多元的な横軸を明確化し、両大学派による影響を体系的に整理することで、中国学史における学術的価値をも確立することが可能である。

一. 日本魯迅研究の歴史的区分

日本魯迅研究の歴史的区分については諸説あるが、最も広く受け入れられているのは戦前と戦後に大別する見解である。竹内好が日本の魯迅研究に及ぼした影響は極めて大きく、彼は『魯迅』を通じて戦後日本の魯迅思想史研究の基本的枠組みを築いた。そのため、思想史を契機として、日中両学界は竹内好の視点を積極的に継承し、戦後日本の魯迅研究の内在的な変遷を多角的に検討してきた。葛兆光は次のように指摘している。「過去に思想史は思想家個人や古典に関するものにとどまっていた。しかし私たちは、人々の生活する現実の世界には、ほぼ平均的な知識・思想・信仰が底流として存在し、日常の判断や解釈、世界の理解の場で実際に機能していることに留意すべきである。このような一般的な知識や思想、信仰

こそが、人々が現実の世界を理解し処理する上で基盤的な役割を果たしているのである。^[1]」。
竹内好の研究を契機として、その後の研究は伝統的思想史に基づく枠組みが主要なものとなり、戦前の研究における一般的な視野と戦後の研究における大衆の動向は相対的に希薄になっていった。この問題を解決するためには研究の起点とその具体的区分に立ち返ることが求められる。

(一) 日本魯迅研究の起点

現在に至るまで、研究の起点を1909年、1920年、1944年に置く三つの立場が知られている。そのうち、1980年に藤井省三は、1909年に日本で展開された周氏兄弟の文学活動を初めて指摘し、彼らがイギリス・ドイツの文学作品を閲読し、『域外小説集』を計画していたことを明らかにした^[2]。当時、藤井は日本魯迅研究の起点を1909年と明記してはいなかった。しかし、2016年に中央編訳出版社から刊行された『日本魯迅研究精選集』の「魯迅在日本世界」において、日本での魯迅の伝播から研究の開始に至る時期を1909年から1926年と位置づけることを示し^[3]、さらに2017年の呂周聚との対談でも同様の見解を改めて提示している^[4]。張杰はこれについて次のように具体的に論じている。「史料的な意義から言えば、それは魯迅兄弟の業績を示すだけでなく、読者の反応を裏づける証拠ともなっている。さらに重要な意義として、それが中国・日本・ヨーロッパ文学の展開のあり方や性質の違いに焦点を当て、その観点から魯迅兄弟の仕事を捉えている点にある^[5]」。張杰は学術史的観点から日本魯迅研究の起点を1909年に位置づけており、この見解には中国の学者である張夢陽と靳叢林も賛同している^[6]。第二の観点は丸山昇によって提起されたものである。丸山は1971年に日本魯迅研究を総括した際、1920年に青木正児が初めて魯迅の名を日本に紹介したことを指摘し、さらに青木の論文「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」^[1]における魯迅言及は「単なる評価抜きの紹介ではなかったことがわかる」^[2]と論じている^[7]。丸山昇は“周樹人”と“魯迅”を厳密に区別し、魯迅が一人の作家として日本の研究者により研究された事実を明らかにしている。呂元明も日本魯迅研究の端緒を1920年に画している^[8]。戈宝権も1978年に丸山昇の見解に与し、魯迅作品を最初に論じたのは青木正児であると明言している^[9]。嚴紹璽も青木正児の論文について「これは日本の学術界において初めて中国の五四運動前後の文学革命の諸問題を真剣に考察したものである」と述べている^[10]。また、尾崎文昭は三つの見解を提示している。その一つとして、彼は「日本の魯迅研究の起点は竹内好の『魯迅』で、1944年に出版されていた」と述べ^[11]、その根拠として、それ以前には学術的に意義ある魯迅研究の著作が存在しなかった点を指摘している。このような厳格な学術的視座は中国大陆においても大きな関心と呼んだが、中国の研究者たちは1944年を日本の魯迅研究の起点とみなすことは避け、むしろ『魯迅』の戦後思想史的意義に着目し、日本近代化の

経験と教訓を省察する方向へと論点を展開させた。

以上の三つの見解を総合すると、日本魯迅研究の起点は1920年と考えるのがより妥当である。藤井が指摘する1909年の紹介は“魯迅”ではなく“周樹人”に関するものであり、魯迅を研究対象として扱ったものではなかった。厳密に言えば、「日本で周樹人が文字によって初めて紹介された年は1909年である」。日本の魯迅研究の起点を1909年とする見方は、作家としての魯迅を研究対象とする視点を欠き、単なるニュース的な紹介にとどまるため、実質的な研究とは言いがたい。1920年8月、狩野直喜および内藤湖南に師事した研究者である青木正児・小島祐馬らは「支那学社」を設立し、同年9月には漢学革新を掲げる月刊誌『支那学』を創刊した。同誌第1巻第1号から第3号（1920年9月～11月）にかけては青木の論考が連載され、胡適・陳独秀の文学理論をはじめ、劉半農・沈尹默・唐俟の白話詩、さらに魯迅の小説も紹介された。青木正児は唐俟と魯迅が同一人物であることを知らず、両者を別個に論じた。その際、唐俟の詩作については「月並だ」³⁾と評したのに対し、魯迅の小説『狂人日記』については、「今迄支那小説家の未だ至らなかつた境地に足を踏み入れてゐる」⁴⁾と評価した。魯迅はこの時すでに作家として世に出ており、日本にも紹介されていたため、その名称・時期・内容のいずれにおいても「日本魯迅研究」の成立に合理性を与えることとなった。1944年を日本魯迅研究の起点とみなすと、その研究は一貫性および理論性の点で円熟の境地に達していた。しかし同時に、戦前に蓄積された多くの研究性を持つ成果は軽視されることもあった。新居格、山上正義、山本実彦らの研究はその一例である。日本魯迅研究において、日中間の相互作用や歴史的淵源、学術的脈絡については十分にうかがい知ることはできない。また、このような卓越した思想史的視野は知らず知らずのうちに他の価値ある研究成果を排除してしまう側面も有していた。

(二) 日本魯迅研究の歴史区分

伊藤虎丸、山田敬三、丸山昇、藤井省三、尾崎文昭らはいずれも魯迅研究を戦前と戦後に区分する見解を示している。1975年、伊藤は『魯迅と終末論』⁵⁾を刊行し、その第Ⅲ部においては、竹内好の魯迅研究を出発点とし、〈幻灯事件〉の解釈の相違をめぐり、戦後日本魯迅研究の変遷と諸学説の違いを総括している^[12]。⁶⁾山田敬三は1977年に出版された『魯迅の世界』第Ⅲ部第1章において、戦後日本の魯迅論を「遺産としての魯迅論」と「新しい魯迅像を求めて」の二つに分けて整理した。「遺産としての魯迅論」では、小田嶽夫の『魯迅伝』を記念碑的著作と位置づけ、竹内好の『魯迅』を最大の遺産とし、その次に位置づけられるのが増田渉や鹿地亘の魯迅研究業績であると評している。「新しい魯迅像を求めて」においては、「魯迅研究会の出版」「丸山昇の方法」「桧山久雄その他」および「魯迅友の会」について論じた^[13]。⁷⁾山田敬三の日本魯迅論に関する総括においては、時間的側面では戦後を中

心に、内容的側面では竹内好を重視していた。山田敬三と伊藤虎丸が主として戦後の魯迅研究に重点を置いたのに対し、丸山昇は戦前の魯迅研究を中心に据えたとされる。さらに、丸山自身は戦後魯迅研究の当事者であるため、それ以上の評価は控える姿勢を示している。丸山昇は既発表の二つの論考の一部に削除・加筆を施し、それを「日本における魯迅」^[14]としてまとめた。その中で、日本魯迅研究を「青木正児から戦前左翼まで」(1920-1931)、「佐藤・増田から小田まで」(1932-1943)、「竹内好以後」(1944-1981)の三期に区分し、戦前と戦後という縦軸に沿って整理した。⁸⁾ただし、戦後についての論考は概括的な説明にとどまり、その後の研究深化に対して一定の余地を残した。2007年、尾崎文昭は清華大学において「戦後日本魯迅研究」と題する連続講義を開講し^[15]、2010年には薛羽が日本においてこのテーマをめぐって尾崎と座談を行った^[16]。その席上、尾崎は戦後の日本魯迅研究の思想的展開、方法論上の転換、ならびに社会的背景について詳細な分析を提示した。尾崎によれば、竹内好の『魯迅』を起点として、次の三つの魯迅研究の系譜が形成されたという。第一に、東京大学の学生およびその周辺社会によって結成された「魯迅研究会」であり、ここから尾上兼英、高田淳、伊藤虎丸、木山英雄、北岡正子らの研究者が輩出された。第二に、竹内好の勤務先であった東京都立大学の学生によって組織された「中国文学研究会」であり、ここから今村与志雄、飯倉照平、竹内実らが育成された。第三に、京都大学において魯迅研究を担った相浦晃、伊藤正文、吉田富夫の系譜である。尾崎文昭が戦後日本魯迅研究を体系化したのに対し、藤井省三は百年にわたる日本魯迅研究を総括し、その展開を八つの区分に分類した。第一段階は「紹介と翻訳の始まり」(1909-1926)、第二段階は「魯迅翻訳潮から魯迅伝記潮」(1927-1945)、第三段階は「戦後、占領終了後の魯迅潮」(1953-1959)であり、ここでは「竹内魯迅」と魯迅の「世界文学化」が特徴とされる。第四段階は「魯迅研究の深化」(1960-1969)で、経済調整の発展、中国文化大革命の影響、ならびに「丸山魯迅」が位置づけられる。第五段階は「魯迅研究の拡大」(1970-1979)、第六段階は「魯迅研究の深化」(1980-1989)、第七段階は「魯迅の普及」と「丸尾魯迅」(1990-1999)、第八段階は「魯迅研究の多元化」(2000-2009)である^[17]。伊藤虎丸から藤井省三に至るまで、日本魯迅研究を整理した研究者らは世代間の継承関係をより強調した形で研究を行ったが、時間的には次第に戦前と戦後の区分が明確化された。

現段階で確認できる資料によれば、本研究に着手した最初の中国人研究者は呂元明である。彼は日本魯迅研究の60年間を次の四期に区分している。すなわち、第一期は「紹介期」(1920-1926)、第二期は「魯迅が日本でさらなる影響力を持った時期」(1927-1936)、第三期は「魯迅研究が制限を受けた時期」(1937-1944)、第四期は「魯迅研究の飛躍期」(1945-1981)である^[18]。呂元明の研究は伊藤虎丸や山田敬三の研究より少し後に行われたが、時間的には戦前と戦後という区分は設けられていなかった。その後の20年間、中国の学界は

日本魯迅研究に関心を払わなかったが、21世紀初頭にはこの分野に関する研究成果が相次いで発表されるようになった。2001年、張杰は1936年までの日本魯迅研究を系統的に総括した。しかし、その研究は多方面の要因により肯定的評価と否定的評価の双方を受けつつも、“戦前日本魯迅研究”とは位置づけられなかったのである。2009年、靳叢林が執筆した「戦前日本魯迅研究概観」^[19]をはじめ、その前後に発表された多くの論文においても、日本の研究者による魯迅研究史の時期区分に賛同する傾向が示された。そして、竹内好の研究を契機として、戦後における日本の魯迅研究についても、より深く掘り下げられるようになった。その例として、趙京華の「活在日本的魯迅」^[20]は、竹内好の『魯迅』を起点に思想・文化・学術の側面から日本における魯迅研究の系譜を考察した。また、劉偉の「“竹内魯迅”と戦後日本魯迅研究」^[21]も戦後の日本魯迅研究における“竹内魯迅”の継承と批判を総括したものである。このような研究動向から、中国の学界も日本の魯迅研究を戦前と戦後に区分する視点に賛同するに至った。

日中両国の学界においては、日本魯迅研究史を戦前と戦後に単純に区分することは確かに重要な転換点を捉えてはいるものの、百年に及ぶ日本魯迅研究を二分するだけでは一面的である。その結果、戦前と戦後の研究の歴史的なつながりや多様な共存のあり方を十分に考慮しないおそれがある。近年、藤井省三はこの問題の解決を試み、百年にわたる日本魯迅研究を精緻に区分した。しかし、その区分は細かすぎるうえ、新たに命名する際の課題も残されている。また、区分の根拠や転換の理由、歴史変遷の論理を十分に示せなかった点が最大の課題である。したがって、日中両国の学界は日本魯迅研究史の客観的事実を尊重するとともに、日中関係、日本の政治革命、思想の継承と転向、現代社会の発展などの要素も考慮する必要がある。そのうえで、伝統思想史の枠組みを超え、より合理的な時期区分の方法を模索すべきである。日本魯迅研究は日中関係という大きな背景のもとで展開されたものである。京都学派の研究傾向と大正民主期の社会環境は魯迅を「革命」という視点の下で日本に紹介することを促した。日中間に相互影響を与える複雑な関係と多様な研究傾向が表れていたことから、日本魯迅の伝播と研究は当初から容易なものではなかった。これを出発点として、増田渉は1932年に「魯迅伝」を発表し、その後、魯迅は次第に日本人に受け入れられるようになった。また、特殊な歴史的背景と魯迅作品の現代性との関係において、竹内好は1944年に、魯迅がアジア出身の作家として、日本の民族と個人の現代的課題を考察する重要な資源であることを指摘した。とくに戦後において、魯迅はアメリカに対抗しつつ、日本の個性と近代軍国主義の困難な状況を克服するための思想的基盤として存在した。こうした局面は1970年代前後に丸山昇によって新たな視角から分析され、さらに1994年に丸尾常喜が出版した『魯迅——人鬼の葛藤』において大きな進展が示された。

二. 日本魯迅研究の空間的視座

日中学界は日本魯迅研究において時間的推移を重視する傾向があるものの、空間的分布に関する明確な認識が不足している。そのため、研究の全体像をより正確かつ深く把握することが難しいおそれがある。したがって、日本魯迅研究を再検討する際には、空間的分布も併せて考慮する必要がある。その際には、戦前日本における魯迅伝播研究の日本国内および中国での地域分布、ならびに戦後日本魯迅研究の三つの中心を軸とした二つの視点からの考察が求められる。

戦前においては、日本の中国領土への軍事的進出に伴う文化的支配、さらには近代以来の日中文化交流の複雑性が重なり、日本魯迅研究において日本と中国双方での地域的分布が形成された。日本国内では、新聞・雑誌・学術誌、さらには翻訳出版を通じて、魯迅の紹介と研究が開始された。その初期の事例として注目すべきは次の四点である。第一に、1920年に青木正児が『支那学』において先駆的に魯迅に関する評価を示したこと。第二に、1922年に清水安三が『読売新聞』で一か月にわたり長編報道と論評「周三人」を連載したこと。第三に、1927年に武者小路実篤が編集した『大調和』において、魯迅の「故郷」が初めて日本語に翻訳されたこと。第四に、1928年に山上正義が『新潮』誌上で「談魯迅」^[22]を発表し、広州時代の魯迅像を描いたことである。青木正児による魯迅の紹介は日本魯迅研究における「革命」の基調を確立するものであり、1920年代の日本国内における魯迅研究はほぼこの視点の下で展開された。初期には「文学革命」の視域において表れ、後期には「革命文学」の訴求として示された。1930年、日本のプロレタリア革命運動は大きな打撃を受け、多くの共産黨員、プロレタリア作家および研究者が「転向」声明を発表した。その結果、「革命」の視野に基づく魯迅研究は政治的打撃を受け、日本国内の魯迅研究は分裂し始めたのである。まず、1932年に世界で初めての『魯迅伝』が誕生した。佐藤春夫の助力のもと、増田渉は山本実彦によって創刊された雑誌『改造』を拠点にその内容を発表し、初めて魯迅の生涯を伝記の形式で詳しく叙述した。これにより、魯迅の日本における影響は拡大し、日本の一般読者が魯迅を理解するための基礎を築き、それまで日本で主流であった「革命」の視野に基づく研究基調を改める契機となった。魯迅は日本国内で次第に声望を高め、著名人たちは彼との交流をますます頻繁にするようになった。その影響で、新聞や雑誌には魯迅を訪ねた記録や研究論文が多く掲載されるようになった。1935年には、白樺派の作家・長与善郎による「魯迅と会見の夜」、正宗白鳥の「モラエス^[23]と魯迅」、そして詩人・野口米次郎の「魯迅と語る——会見記」が発表された。しかし、これらの内容が浅薄であったためか、魯迅はそれらに対して不信の念を示した^[24]。また同年、「転向」作家の亀井勝一郎が発表した「魯迅断想」は、インテリゲンチヤの圧迫と反抗を経て現実への回帰を試みる視点か

ら魯迅を論じたものであり、当時の“転向”文学が思想的資源を模索する傾向を示す一例といえる。1936年、山本実彦は雑誌『文芸』において「上海からSへ」と「魯迅」を発表し、魯迅とマルクス主義、魯迅と孔子儒教的イデオロギー、さらに魯迅と現実政治および政治家との関係という三つの側面から論及し、自由主義の立場を明確にした。また、1934年には新居格が上海に滞在中、魯迅と数回にわたり会見したのち、魯迅に関する11篇の文章を発表している。その中で彼は、魯迅が日本思想や文学の影響を受けたとする内山完造の見解に反論し、魯迅は世界文学に精通するのみならず、中国古典文学にも深い造詣を有し、文学者であると同時に思想家として政治的動向にも明るかったと評価した。巖沼豊は新居格を当時の日本における自由主義的魯迅研究の中で最も影響力のある評論家の一人と位置づけている^[25]。さらに、佐藤春夫の示唆を受けた中村光夫は、魯迅を二葉亭四迷と比較し、両者が直面する歴史的任務を出発点として、それぞれの歴史および現実に対する思考の差異を精緻に分析した。これにより、日本における本格的な魯迅比較文学研究の道を切り開いたのである。

日本国内における魯迅研究の進展に呼応して、中国における日本系メディアにおいても、魯迅の紹介や研究に関する記事が掲載されていた。具体的には、北京の『北京週報』、大連の『満蒙』、上海の『上海日日新聞』、旧満洲国の『大同報』などにその例を見ることができる^[26]。『北京週報』は1921年に藤原鎌兄によって創刊・編集され、1930年9月に停刊されるまで、通算418号が発行された。丸山昏迷（本名・丸山幸一郎、別号・昏迷生）は、藤原が主編を務めていた時期に、『新支那』および『北京週報』の記者として活動していた。1919年に北京へ渡った丸山は、1924年8月に帰国するまでの間、中国の文化・教育界の人々と幅広く交流を持った^[27]。彼は周氏兄弟とも深い関係を築いていたが、1922年の魯迅日記が失われているため、当時の具体的な交遊の様子を詳細に知ることはできない。それでも、1923年の魯迅日記には丸山との関わりに関する多くの記述が確認される^[28]。丸山昏迷と周氏兄弟との文化的交流は、『北京週報』における魯迅作品の翻訳および研究論文の発表を促す契機となった。そのため、1922年6月から1923年12月にかけて、魯迅に関する翻訳・会談・研究を扱った記事は計10篇に及んでいる。一方、1920年代初頭に大連で刊行された日本語雑誌『満蒙』は、「満鉄」の支援を受けた機関誌的性格をもつ宣伝媒体であったが、同時に、さまざまな立場の知識人が参加していたため、「大東亜共栄」を唱える論調がある一方で、プロレタリア革命を志向する主張や自由主義的傾向も併存していた。こうした多様な思想的背景が『満蒙』における魯迅伝播研究をいっそう複雑なものにしていたのである。注目すべき三名の研究者が存在する。すなわち、山口慎一、原野昌一郎、および大高岩である。1929年、山口慎一は「支那の小説二十三」において『阿Q正伝』に言及したが、深い考察には踏み込まなかった。1931年、原野昌一郎は「中国新興文芸と魯迅」を発表し、郷土作家とその特異性、魯迅と世界文学作家、魯迅芸術総評という三つの視角から魯迅を体系

的に研究した。その結果、伝統社会と現実によって形成された中国の国民性を分析したうえで、魯迅は近代中国を最も的確に表現する作家であると評価し、意図的にトゥルゲーネフとの比較も行った。1932年、大高岩が執筆した長文「魯迅再考」においては、銭杏邨による魯迅批評に積極的に応答し、魯迅の非革命的側面を誇張し、かつ否定する論旨を展開した。旧満洲国における日本人の魯迅研究は日本の魯迅研究の一部として位置づけられるべきである。『大同報』には、野口米次郎、池田幸子、増田渉、内山完造らが発表した魯迅研究の論考が掲載されている^[29]。1920年代以降、中国における日本メディアの基調は「日中親善」「同文同種」と「アジア対欧米」という理念に貫かれた宣伝であった^[30]。魯迅は日本留学の経験を有し、中国革命文学の旗手として広く認識されていたため、中国における日本メディアの視野に入るのは当然である。野口米次郎の魯迅研究は学術や文化交流の視点から魯迅を紹介する側面を持ちながらも、このような文脈に位置づけられる典型的な一例といえよう。中国国内における日本人による魯迅研究は日本国内への伝播の架け橋となり、日本における魯迅研究の進展を促す役割を果たしていた。1928年、『上海日日新聞』に井上紅梅による『阿Q正伝』の翻訳が掲載され、1931年には雑誌『満蒙』に長江陽による同作の翻訳が発表された。これらの翻訳は日本国内にも影響を及ぼし、1929年には井上紅梅訳『阿Q正伝』が日本で初めて紹介され、さらに1931年には『満蒙』の影響を受けた松浦珪三および山上正義がそれぞれ日本語訳を刊行した。1932年には佐藤春夫が『中央公論』で魯迅作品の翻訳を発表し、日本における魯迅の知名度を大きく高める契機となった。これに関して、丸山昇は「これ以降、魯迅の名はようやく日本の文化界に知られるようになった」と指摘している^[31]。⁹⁾さらに、日本の研究者である飯倉照平も『北京週報』は日本人によって広く参照・閲覧されていると指摘している^[32]。¹⁰⁾中国国内における日本の魯迅研究は魯迅の日本への流布の橋渡しとなり、日本本土での魯迅の普及と研究を加速させた。戦前の日本における魯迅研究の空間的分布は本質的には戦争と革命の影響の結果であり、日本の中国侵略に伴う文化交流の産物である。日本国内の研究と比較すると、中国国内における日本メディアは、一定程度日本の言語環境から独立しており、中国国内における魯迅の伝播や研究の独自の特徴を示している。周兄弟は日本に留学し、1920～30年代に日本の文化メディア関係者と親密に交流した。彼らの作品や思想はアジア近代化の進展と深く関連するのみならず、周兄弟自身も魯迅の伝播と研究に積極的に関与した。その結果、日本人は率先して魯迅に関心を寄せ、世界における魯迅研究の先駆的役割を果たすに至った。

第二次世界大戦後、日本の魯迅研究は国内に回帰し、地域的には関西、関東、東北の大きく三つの拠点に分けることができる。関西における魯迅研究は、京都大学の青木正児によって切り口が開かれ、戦後の魯迅研究の中心的地位を占めるに至った。まず、相浦杲、藤井正文、吉田富夫といった研究者が登場し、さらに1970～80年代には山田敬三、片山智行、中

井正喜、北岡正子、谷行博らが現れ、魯迅研究に多大な貢献を果たした。これらの研究者が在籍した大学は神戸大学、大阪大学、関西大学、名古屋大学である。1934年、東京大学在学中の竹内好らによって「中国文学研究会」が結成され、中国近代作家に関する考察が行われた。竹内好は同会誌『中国文学』に魯迅に関する論文を発表し、1944年には著書『魯迅』を刊行している。竹内は、強制的に兵役に服した経験を背景として、当時日本で強調されていた「大東亜文学」の主張を批判的に省みるとともに、文学主義としての魯迅に回帰する試みを通じて、自身の根本的な思想的変革を模索したのである。戦後、竹内好は慶應義塾大学および東京都立大学で教鞭を執り、彼の指導の下で成長した研究者には今村与志雄や飯倉照平がいる。戦後、東京大学の学生によって結成された「魯迅研究会」は、政治運動に左右されることなく、科学的かつ歴史的な方法で魯迅を読み、研究すべきであると主張していた^[33]。この研究会からは丸山昇、尾上兼英、高田淳、伊藤虎丸、木山英雄など、多くの代表的研究者が輩出された。彼らの研究姿勢や考え方は多かれ少なかれ竹内の影響を受け、関東地方の中心としての東京は、魯迅研究における名実ともに本拠地の役割を果たすに至った。竹内好の周辺の研究者に加え、東京には早稲田大学で教鞭を執った新島淳良や、東京大学で比較文学研究を継承した藤井省三も存在した。三つ目の日本における魯迅研究の中心は東北の仙台と北海道であり、研究者は主に東北大学および北海道大学に集中していた。1965年初夏、東北大学の細菌学教授である石田名香雄は仙台医学専門学校時代のスライド映写機とスライドフィルムを発見した。半澤正二郎による実物検証の結果、これらは魯迅が留学中に当時の映像資料を上映するために使用したものであったことが確認された。しかし、ひと箱20枚のスライドフィルムのうち現存するのは15枚のみであり、当時の露探処刑の場面を記録したとされる映像部分は現存していない^[34]。1966年10月、半澤正二郎は著書『魯迅・藤野先生・仙台』を刊行した。東北大学法学部を卒業した渡辺襄は「仙台における魯迅の記録を調べる会」の事務局長を務め、1978年に『仙台における魯迅の記録』を編集し、1984年には「魯迅の『露探』幻燈事件——その事実とフィクション性をさぐる」を発表した。また、東北大学に所属していた阿部兼也は仙台における魯迅の活動に関する調査を主導し、魯迅の仙台留学に関する多くの重要史料を発掘した^[35]。その成果として、1985年に「魯迅仙台時代の模索——思想化されなかった『退化』意識の払拭」^[11]を発表している。さらに、1968年には魯迅研究に携わっていた丸尾喜が北海道大学の招聘により中学校から転任し、1990年には東京大学に着任した^[36]。このように、戦後日本における魯迅研究は、地域的な分布から見ると関東・関西・東北を結ぶ三角形の構造を形成しており、そのうち関東と関西の動向がより活発であった。他方で、東北大学における研究は主として魯迅と仙台との関わりを中心としたものであり、地域密着型の実証的研究という性格がより鮮明であった。

三. 日本魯迅研究の時空的再構成の意義

日本魯迅研究の時空的再構成は、先行研究において見落とされてきた部分を掘り起こし、歴史の全体像と転換点として意義をもつ局所的現象とを、根拠に基づいて明らかにするとともに、その地理的な分布と学術的な流れをも解明することを目的としている。したがって、本研究には次の三つの意義があると考えられる。

(一) 百年にわたる日本魯迅研究の縦の連続性と横の多様性の解明

魯迅研究の起点を1944年に置くなら、それ以前の研究を軽視することになり、百年に及ぶ日本魯迅研究の全体像を見失うおそれがある。言うまでもなく、日本魯迅研究は二十世紀における東亜革命およびその後の継続的課題とともに発展してきたものであり、その時代的意識と困難な状況は明白である。したがって、歴史の推移に応じて、縦の連続性と横の多様性がともに顕在化しているのである。

まず、横の多様性を見てみよう。日本における魯迅研究の出発点は1920年にあり、1944年の竹内好『魯迅』が刊行されるまでの間にも、すでに多様な研究が展開されていた。その中でも注目されるのは主として次の七つの傾向である。第一は「革命」という視座に立つ魯迅研究であり、「文学革命」と「革命文学」という二つの方向に分かれる。前者には青木正児・本間久雄・辛島驍らが、後者には山田清三郎・藤枝丈夫・山口慎一・大高岩・原野昌一郎らが属していた。第二はマルクス主義的立場からの魯迅研究で、丸山昏迷・山上正義・林房雄^[37]らがこれに含まれる。第三は虚無主義的傾向を示す魯迅研究で、清水安三・佐藤春夫・小田嶽夫・太宰治らが代表的である。第四は自由主義的な魯迅研究で、新居格がその中心的人物である。第五は理想主義および自然主義的な魯迅研究で、長与善郎や正宗白鳥がこれに該当する。第六は比較文学的な観点からの魯迅研究で、中村光夫が代表例として挙げられる。第七は文学主義（自由主義的傾向ともいえる）に立脚した魯迅研究で、その代表者は竹内好である。このように、わずか24年という期間のうちに、日本魯迅研究にはこれほど多様な方向性が現れた。研究の初期段階からすでに多元的な共存の様相を示していたことは、当時の日本における思想潮流の複雑さ、さらには西洋および東アジア諸国との思想的交流と葛藤の反映であったと考えられる。この多元的な傾向は竹内好以降も継続し、戦後日本における主要な問題意識と近代化の多面的な展開を示している。その具体例として、丸山昇による「革命」的視座とマルクス主義的魯迅研究、北岡正子の実証主義的研究、伊藤虎丸・尾崎文昭による思想史的研究、藤井省三・中井政喜・谷行博による比較文学的研究、丸尾常喜の精読に基づく研究、さらに中等教育における魯迅研究、社会活動派による研究、そして池田大作による民間的魯迅研究を挙げることができる。このような同時的次元における多元

化は異なる歴史的時期において魯迅研究が多角的に展開されてきたことを示しており、魯迅像が一つに定まっていなかったことを物語っている。したがって、「革命」的視座に立つ戦前の研究の位置を一方的に強調したり、竹内好の戦後における思想史的研究の意義を過大に見積もったりすることは、多面的な展開を正確に把握するうえでの障害となるだろう。

縦の連続性については、具体的に三つの研究傾向を挙げることができる。すなわち、「革命」的な魯迅研究、自由主義的な魯迅研究、そしてマルクス主義的な魯迅研究である。「革命」的視座に立つ魯迅研究は青木正児に始まる。彼はその研究において、中国の文学革命を積極的に肯定し、中国新文学の形成とその研究を伝統的漢学思想への批判の文脈の中に位置づけた。また、欧州の新思想を積極的に摂取することで、大正期における民主主義的文化運動の一翼を担う存在となった。このように、魯迅を媒介とし、思想的資源として日本社会の変革に応答しようとする思考様式は、百年にわたる日本の魯迅研究を貫いてきた。戦後、日本が米軍の占領下に置かれるなかで、多くの知識人は日本近代の挫折と再生の課題を根底から再検討した。その際、魯迅の思想は再び文化的・思想的資源として召喚され、日本における「革命」的思考の一契機として機能した。藤井省三の統計によれば、1946年から1959年にかけての魯迅作品の日本語翻訳数は、1930年から1945年の20編から37編へと増加し、評論および伝記の刊行も2編から26編へと急増している^[38]。1960年代に入ると、丸山昇が「革命」的視座から魯迅を論じた研究を発表し、「竹内魯迅」に続く「丸山魯迅」の時代を切り開いた。彼はさらに、「革命人」という新たな概念を提示した。自由主義的な日本魯迅研究もまた青木正児に始まり、その伝統を継承した新居格は日本における東亜文化共栄の思想とは明確に一線を画していた。竹内好は自由主義的魯迅研究の系譜をしっかりと受け継ぎ、日本の知的主流に根ざした精神で魯迅を理解した。彼は自らの思想的立場と日本の中国侵略戦争を深く省察し、知識人としての独立と自由の精神を体現している。この自由主義的な伝統は竹内好の提唱によって戦後日本における主流の潮流となった。そのことは伊藤虎丸、丸尾常喜、木山英雄らの研究によって十分に裏づけられている。日本におけるマルクス主義的魯迅研究は丸山昏迷によってその基礎が築かれた。彼は1920年の時点ですでに魯迅を単なる創作家ではなく社会革命家として位置づけていた。その後、山上正義や林房雄らの研究によって、魯迅の革命的作家としての粘り強い闘争精神が一層掘り下げられ、当時の日本プロレタリア文学運動が直面していた困難を克服するための精神的支柱として受けとめられるようになった。戦後における共産党員・丸山昇の研究もマルクス主義的魯迅研究の延長線上に位置づけられる。彼は1930年代における魯迅と中国共産党、さらには左翼作家連盟との関係を詳細に検討し、魯迅におけるマルクス主義受容の過程を全面的かつ深く考察している^[39]。以上三つの研究潮流の分析から明らかなように、日本における百年の魯迅研究は戦前・戦後という区分のもとに構成され、戦後研究への偏重が顕著である。その結果、百年を

通した日本魯迅研究の連続的な視座が欠け、縦軸の中でその変遷の道筋を明確に見通すことができない。各時期に固有の特色が存在するとはいえ、歴史全体の内部的展開は途中で断ち切って論じることはいえない。

(二) 日本近代における二大学派の魯迅研究への影響の再検討

日本魯迅研究は百年に及ぶ変遷を経ており、戦前・戦後それぞれの時期における地域的分布も当時の学派的傾向と一定の関連を有している。しかし、日本の国土は広大ではなく、各地域の研究者たちは近代学術の展開に伴って相互に交流・影響を及ぼし合うようになった。そのため、学術界全体としては、地域的差異という問題を次第に重視しなくなっていった。戦前における日本の魯迅研究の主流となった思想的傾向と研究方法は、主として関西と関東の二地域から発している。実際、その源流は東京帝国大学と京都帝国大学に求められる。京都帝国大学は京都学派^[40]の中心であり、東京帝国大学は東京派^[41]の拠点として位置づけられていた。京都学派は狩野直喜と内藤湖南を代表とし、彼らは清朝考証学の優れた伝統を継承しつつ、オーギュスト・コントの実証主義的思想をも吸収していた。その立場は、伊藤仁斎を中心とする儒教古典原義の古義学派とは異なり、煩雑な考証を排し、文明批評および社会改造の視点から独自の学術的見解を展開した点に特徴づけられる。また、京都学派は中国伝統の考証学に拘泥することなく、西洋の先進的な学術理念を積極的に吸収し、それを言語学の研究に融合させた。さらに、考古学的発掘や文献の収集を重視し、実地調査的性格をも帯びていた。本学派には一定の共通傾向が見られるものの、その代表者と若手研究者である青木正児とのあいだには、明確な思想的隔たりが存在していた。狩野直喜と内藤湖南が明治期の政治体制の側面において儒教的価値観を擁護していたのに対し、青木正児は大正デモクラシーの雰囲気に応じ、「漢学革命」を唱えた。しかし、第二次世界大戦前までの時期において、彼の主張は学界の主流から十分な評価を得るには至らなかった^[42]。東京派は、西洋志向の色彩が濃く、日本の現実政治とも緊密に結びついていた学派である。その代表的人物としては、白鳥庫吉、津田左右吉、服部宇之吉、宇野哲人などが挙げられる。彼らはいずれも中国伝統文化に対して批判的かつ懐疑的な態度をとり、日本的近代主義を唱えた点に共通性が見られる。また、多くの論者が「脱亜論」と何らかの形で関係していたことも注目される。興味深いのは、東京派がドイツのランケ史学に由来する実証主義の方法を導入しつつも、同時に世界的な視野と懐疑的な批判精神を明確に保持していたことである。たとえば白鳥庫吉は、堯・舜・禹の史実性そのものに懐疑的な立場をとり、世界史的な進程の観点から満漢の民族革命という枠組みを超え、中国近代革命をヨーロッパと中国の新旧両文化の衝突の結果として位置づけた。梁容若は「東大と京大の学風を比較すると、東大の方が視野は広く、現実的であり、新資料の探索に努め、新しい風潮を積極的に取り入れ、政治的雰囲気も

濃厚である。それに対して、京大は堅実で、研究はより深く協調的であり、視点も長期的かつ超然としている」と指摘している¹⁴³⁾。この二つの学派は日本近代学術発展の源流をなす存在であり、以後のあらゆる思想的・学術的展開は多かれ少なかれその影響下にある。日本魯迅研究は狭義の漢学研究とは同一ではないものの、その形成と発展の過程において、これら二大学派と深く関わっている。

日本魯迅研究は戦後までに地域的に三つの主要な中心を形成した。専門家の地域的分布だけでは、それぞれの学術的傾向を厳密に区分することはできない。しかし、依然として彼らの異なる学術的立場を確認することは可能であり、その差異は概ね東京派および京都学派との関連において理解できる。青木正児の魯迅研究は、京都学派の実証的伝統を継承すると同時に、先代の保守的体制、すなわち明治政府の説教体的体質としての儒教の痼疾を突破しようとする姿勢も示し、さらに支那学の革新を志向した。戦後、京都大学出身の魯迅研究者である相浦晃、伊藤正文、吉田富夫はいずれも京都学派と関連している。相浦晃は倉石武四郎および吉川幸次郎に師事し、京都大学における実証主義と言語的解釈の伝統を重視した。その立場から、実証主義的手法を用いて魯迅小説『藥』（「魯迅の小説の一側面——主として作品「藥」について」¹²⁾）を研究した。北岡正子は東京大学出身であるが関西大学に所属し、生涯を通じて魯迅の早期文献の考証に努めた。彼女の学術手法はむしろ京都学派の実証的伝統に近いと言える。代表的著作としては、『〈摩羅詩力説〉材源考』（1983）や『魯迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から退学事件まで』（2001）、『魯迅 救亡の夢のゆくえ——悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』（2006）などがあり、これらから北岡の実証的・資料重視の研究姿勢が窺える。丸尾常喜は東京大学卒業後、大阪において増田渉のもとで魯迅研究を進めた。彼の研究には言語学的分析と実証的考証を重視する関西学風の特徴が色濃く反映されている。その具体的な表れは代表作『魯迅——「人」と「鬼」の葛藤』¹³⁾の随所に見出すことができる。尾崎文昭は、丸尾常喜の晩年の研究態度に触れ、彼が『呐喊』をはじめとする数篇の小説について詳細な分析メモを残していたことを証言している。丸尾は、小型のノートのキーワードとなる部分に付箋を付し、権威ある漢語辞典を渉猟するとともに、呉語の専門家にまで解釈を求めながら、隙間なく書き込みを重ねていったという。そのような精緻な作業を通じて、ようやく自ら納得しうる結論に到達したとされる¹⁴⁾。1944年、竹内好は『魯迅』を刊行し、当時の主流的な見解に対して独自の立場を打ち出した。その背景には、彼が1931年に東京大学文学部哲学科で学んだ経験が大きく関わっている。当時、東京大学で教鞭を執っていた白鳥庫吉は、「支那古伝説の研究」¹⁴⁾において、堯・舜・禹を儒家思想が創り上げた架空の人物とみなし、その歴史的事実性を否定していた。また、中国哲学史の大家であった宇野哲人は、狩野直喜の理論を乗り越え、孔子を日本の政治的信仰と結びつけて現実政治に積極的に関与し、いわゆる「国体」理念を支える思想的役割を果たしてい

た。竹内好が東京大学で学んでいた時期は、ちょうど白鳥庫吉や宇野哲人の批判的思想が「国体」論と密接に結びついていた時期にあたる^[45]。竹内好の『魯迅』は、明らかに彼らの懐疑的・批判的精神を受け継ぎながら、東京派に見られる国権論や侵略思想を排し、魯迅を思想的媒介として、個の存在に立脚した現実的立場から思索を新たにしたものである。竹内は自由な知識人としての学術的立場から次のように述べている。「中国文学研究会は、漢学と支那学の地盤から生まれた。支那学が漢学を否定することによって学問として成立したように、私たちは官僚化した漢学と支那学を否定することによって内から学問の独立を勝ち得ようとした」^[46]。¹⁵⁾竹内好の主張は、東京大学の学風に見られる世界への開放性と、批判精神から芽生えた新しい思想的動向の一端を示すものであった。彼は日本近代官僚学派に特有のイデオロギー的枠組みを払拭しようと努め、方法論の面でも日本近代「支那学」の実証主義的伝統と一線を画した。そのため、著書『魯迅』には多くの課題と未完の問題意識が残されたのである。戦後、東京大学の学生によって設立された「魯迅研究会」は、丸山昇、尾上兼英、高田淳、伊藤虎丸、木山英雄、丸尾常喜など、多くの優れた魯迅研究者を育てた。その流れは今日まで続き、藤井省三や尾崎文昭もその系譜に連なっている。彼らはいずれも竹内好の研究路線を踏まえつつ、その限界を乗り越えようと試みた。伊藤虎丸と尾崎文昭は竹内の魯迅観・中国観を批判的に継承しつつ発展させ、丸山昇、木山英雄、丸尾常喜、藤井省三らは竹内の思想的枠組みを超えて新たな研究の地平を切り開いた。これらの研究者は、竹内好が退けた史学的実証の伝統を再評価し、魯迅の生涯資料や作品を出発点として、近代学術研究の新たな視野を汲み取りながら魯迅研究をさらに前進させた。東北大学の前身である東北帝国大学の学術的伝統は京都帝国大学の学風を源流としている。「京都帝国大学を中心とする支那学の勃興は、新に設立された東北帝国大学の教官を、すべてその手にゆだねるに至った」^[47]。¹⁶⁾著名な教官である青木正児（その後京都大学に戻り着任）、武内義雄、岡崎文夫はいずれも京都帝国大学の出身である。この学術的伝統は現代の東北大学人文学科の研究にも影響を及ぼしており、同大学で教鞭を執った半沢正二郎や阿部兼也といった魯迅研究の専門家たちは、京都学派の実証主義とフィールドワークの伝統を受け継ぎ、「仙台の魯迅」の実像を復元するうえで極めて重要な役割を果たした^[48]。丸尾常喜は京都大学を卒業後、北海道大学において教鞭を執り、のちに再び京都大学に復帰した。京都大学から東北大学へと連なる学術的伝統は、さらに北海道大学にも及んでおり、丸尾の研究には京都学派の実証主義的学風が継承されているといえる。戦後の魯迅研究は、東京と京都という二つの文化的・学術的中心の伝統を継承しつつ、京都―東京を起点として仙台・北海道へと広がる地域的展開を示した。この地域的広がりとは日本における魯迅研究が近代において発展を遂げたことを端的に物語っている。また、学術的系譜の上でも、京都学派の実証主義と東京派の世界的視野および懐疑的・批判的精神を継承しつつ発展させることによって、日本の魯迅研究に

おける近代性の学問的融合と推進が具現されたことを示している。京都学派の源流は、いわゆる京都派に求められる。京都大学における初期の中国研究者の多くは東京大学出身であったが、やがて独自の学術理念を確立し、京都派・京都学派という独特の伝統を形成した。その後、戦後の学術発展にともない、これら両派の学風から影響を受けた魯迅研究者たちは、自らの出身流派にとらわれることなく、近代学術の国際的基準に則して学問を融合・発展させ、魯迅研究をさらなる段階へと押し上げていった。例えば、丸山昇は東京大学の出身であるが、1930年代の日本における魯迅研究の不十分さを克服しようと試みた。彼は京都学派の実証主義的で地道な学風を継承しつつ、マルクス主義的な研究視点を融合させ、さらに京都派の世界的視野と政治重視の伝統を受け継いで、「革命人」という新しい魯迅像を提示した。片山智行も東京大学の出身であり、その後、関西の大阪市立大学に在職中に『魯迅のリアリズム——「孔子」と「阿Q」の死闘』を刊行した。彼の研究は歴史的資料と魯迅の思想および方法論との融合を重視する点に特徴がある。丸尾常喜は東京大学文学部卒業後、関西の大阪市立大学大学院に進学し、増田渉の指導の下で魯迅研究を行った。その後、1990年代に招聘を受け、北海道大学から東京大学に移籍した。言語面・民族性・実証性・思想性を一体として融合させた力作『魯迅——「人」と「鬼」の葛藤』を刊行した。

(三) 日本中国学史価値の構築

百年に及ぶ日本魯迅研究の時空的再構築は、日本漢学との関係を総合的に呈示できるとともに、日本近代以降の中国学術の変遷における内在的な相互作用をも明らかにすることができる。日本魯迅研究は日本中国学の一部を構成していながらも、戦前・戦後のいずれか一方に偏重して論じられることが多く、全体的な史的構築を欠いてきた。そのため、研究の時間的射程は主として戦後80年に限定され、内容面でも竹内好およびその後継者による思想史的研究に縮小される傾向が見られた。その結果として、日本魯迅研究は日本中国学史の大きな文脈から遊離するに至ったのである。このような状況は日本中国学史を通史的に扱った既往研究の傾向にも表れている。倉石武四郎『本邦における支那学の発達』、李慶『日本漢学史』、および嚴紹盪『日本中国学史稿』といった日本中国学通史、または漢学通史の著作の中で、魯迅研究に関する章を設けているのは嚴紹盪の『日本中国学史稿』のみである。同書では、日本における1920年から1944年までの魯迅研究を日本中国学の視野に位置づけているが、残念ながら1944年以降の日本魯迅研究は扱われていない。しかし、戦後の日本魯迅研究がもつ意義は決して小さくない。このような状況となった要因の一つは、戦前の日本において中国近代文化の研究が必ずしも独立した学問領域として認識されていなかったことにある^[49]。もう一つの要因は、日本魯迅研究の全体的な歴史像が体系的に構築されず、断片的なまま日本中国学史の大きな流れの中に位置づけられてこなかった点に求められよう。

魯迅は日本と深い関わりをもつ近代作家であるため、研究対象として伝統的漢学の窠臼を打ち破り、伝統漢学から現代中国学への転換を実現し得る存在である。そのことによって、アメリカ発の中国近代・現代文化研究としての中国学とも接続しうるのである。竹内好以前の日本魯迅研究は、日本の伝統的学術が分化し、成熟へと向かう過程に位置していた重要な段階にあった^[50]。1920年前後、京都学派の流れを汲む青木正児は、その学風を受け継ぎながらも、より広い視野から中国文学革命に関心を寄せていた。彼は胡適や魯迅といった中国文学革命の先駆者たちを日本に最も早く紹介した一人である。青木正児は京都学派を代表する支那学研究的規範的枠組みを突破しようと試み、中国新文学の研究へと転じようとした。しかし、このような試みは当時の主流漢学研究界からは十分に評価されなかった。戦後の日本における魯迅研究の展開を振り返ると、そこにはアジア近代化の視野と、東京派に見られる現実政治を重視する伝統とが、共通の学問的血脈として受け継がれていることがわかる。実証的研究の面では京都学派の堅実な学風が継承され、比較文学的な研究もまた明治維新以来の文明開化の精神を引き継いでいる。これらの学問的潮流が交錯することによって、日本魯迅研究には戦前から戦後へと連なる一貫した系譜が形成され、同時に、魯迅という存在を通して、日本漢学から日本中国学への転換が具体化されたと言える。空間的構造の観点から見ると、戦前の日中関係の影響により、日本魯迅研究は本土と非本土とに分布し、「東亜共栄」という日本的イデオロギーの色彩を帯びるとともに、科学的研究の多様化という傾向も示していた。中国国内での日本による研究は、「東亜共栄」という視野のもとで進められた。その背景には、依然として日本の侵略政策を支えた東京派と京都学派の理論的基盤が存在しており、その傾向は『満蒙』という雑誌においてとくに顕著に表れていた。しかし一方で、科学的多様化傾向はこれら二大学派の優れた学術的伝統とも深く関係していた。たとえば、革命を視座とする研究、自由主義的研究、さらにはマルクス主義的研究などが、いずれもこの二大学派に共通する開放的な学問的視野と批判的・懐疑的な精神に根ざしていた。また注目すべき点として、日本の植民地拡大にともない、多くの新聞記者や学者が中国に渡ったことが挙げられる。彼らの中には、中国で実地調査や学術研究を行った者もいれば、中国で教育を受けた者もあり、名実ともに“中国通”と呼び得る存在であった。こうした経験の蓄積はのちに彼ら自身が近代的意義をもつ日本中国学研究へと転換していくための基盤となった。日本の敗戦後、中国から帰国した人々について、梁容若は次のように述べている。「日本では、戦前・戦中を通じて、日本人が中国を統治・管理する必要から、中国語学習や中国事情に関する学術研究が一時的に盛んになった。中国に長期間滞在し、現地の高校や大学で教育を受けた日本人青年も少なからず存在した。敗戦後、これらの人々は相次いで帰国し、習得した中国語能力を活かして学術研究に従事したため、比較的容易に顕著な成果を上げることができたのである」^[51]。実際、戦後にはそのような多くの第一世代の日本魯迅研究

者が登場している。竹内好、増田渉、内山完造らはその代表的存在であり、彼らは中国近代作家である魯迅の思想と文学を本格的な学術研究の対象へと導いた。これによって、日本における魯迅研究は名実ともに日本中国学の一領域として確立されたのである。さらに彼らは、日本近代以来の京都学派と東京派という二大学派の優れた伝統を継承しつつ、魯迅研究における近代的学問への転換を実現した。戦後日本魯迅研究の空間的展開に見られる三つの中心もこの流れの中から生まれたが、それにとどまるものではない。尾崎文昭が指摘した研究者の世代交代についても、彼らの方法論や思考の枠組みには京都学派と東京派の影響が少なからず見られ、一定の変化や発展も認められる。しかし、このような動向は日本近代学術の伝統が現代社会において継承され、学派間の融合と新たな学問的展開が具現されたことを示している。

四. 結論

百年にわたる日本魯迅研究の時空的再構築は、研究史の全体的構造と個別的展開の双方に立ち返ることによって、過去百年の間に日本と中国が織りなしてきた複雑な関係の中で、中国近代文化を摂取・受容してきた一側面を明らかにするものである。日本魯迅研究は「外国学」として展開しつつも、日本固有の立場と方法を有しており、その歩みは、日本が近代化の過程において外来文明を吸収しながら文化的主体性を再構築しようとした不断の努力を如実に示している。魯迅は、近代東アジアにおける文化的相互作用の象徴的存在として、日本の知識人にとって重要な文化資源とみなされ、その研究はさらに深化していった。研究者たちは魯迅の思想と文学を批判的に受容しつつ、自国の文化的・学術的伝統を鍛え上げ、確固たる成果によって日本近代文化の発展に寄与したのである。このように、百年に及ぶ日本魯迅研究は、日本文化の成果にとどまらず、アジア諸国が近代化を模索するうえで重要な範例となる文化的資源でもある。古代と現代、東洋と西洋が交錯する現実の困難の中で、この日本魯迅研究の歴史的展開そのものが学術の現代的転換と文化的再生の可能性を示していると言えよう。それはまた、中国魯迅研究や文化的主体性の再構築に対しても、重要な示唆と啓発を与えるものである。

原注

- [1] 葛兆光『思想史的写法——中国思想史導論』（第二版）、上海：復旦大学出版社、2013年、11頁。
- [2] 藤井省三「日本紹介魯迅文学活動最早の文字」、『復旦学報』、1980年第2期。
- [3] 藤井省三『日本魯迅研究精選集』、北京：中央編訳出版社、2016年、1-13頁。

- [4] 呂周聚・藤井省三「日本魯迅研究の歴史と現状——藤井省三教授訪談」、『社会科学輯刊』、2017年第3期。
- [5] 張杰「日本魯迅研究(-)」、『魯迅研究月刊』、1997年第7期。
- [6] 張夢陽「日本魯迅研究概観」、『文芸研究』、2006年第12期。
靳叢林「戦前日本魯迅研究概観」、『外国問題研究』、2009年第1期。
- [7] 丸山昇『魯迅・革命・歴史——丸山昇現代中国文学論集』、王俊文訳、北京：北京大学出版社、2005年、320頁。
- [8] 呂元明「日本の魯迅研究史」、『魯迅研究年刊』、西安：陝西人民出版社、1981年、385頁。
- [9] 戈宝権「青木正児論魯迅」、『社会科学輯刊』、1978年第1期。
- [10] 嚴紹盪『日本中国学史稿』、北京：学芸出版社、2009年、338頁。
- [11] 尾崎文昭・薛羽「戦後日本魯迅研究——尾崎文昭教授訪談」、『現代中文学刊』、2011年第3期。
- [12] 伊藤虎丸『魯迅と終末論——近代現実主義の成立』、李冬木訳、北京：生活・読書・新知三聯書店、2008年、189-281頁。
- [13] 山田敬三『魯迅の世界』、東京：大修館書店、1977年、273-286頁。
- [14] 丸山昇『魯迅・革命・歴史——丸山昇現代中国文学論集』、王俊文訳、北京：北京大学出版社、2005年、319頁。
- [15] 王得后「聆聽尾崎文昭教授講授「戦後日本魯迅研究」記」、『魯迅研究月刊』、2008年第2期。
- [16] 尾崎文昭・薛羽「戦後日本魯迅研究——尾崎文昭教授訪談」、『現代中文学刊』、2011年第2期。
- [17] 藤井省三「魯迅在日文世界」、王曉白訳、『日本魯迅研究精選集』、北京：中央編訳出版社、2016年、1-13頁。呂周聚・藤井省三「日本魯迅研究の歴史と現状——藤井省三教授訪談」、『社会科学輯刊』、2017年第3期。
- [18] 呂元明「日本の魯迅研究史」、『魯迅研究年刊』、385-406頁。
- [19] 靳叢林「戦前日本魯迅研究概観」、『外国問題研究』、2009年第1期。
- [20] 趙京華「活在日本的魯迅」、『読書』、2011年第9期。
- [21] 劉偉「“竹内魯迅”と戦後日本魯迅研究」、『吉林大学社会科学学報』、2010年第6期。
- [22] 丸山昇『魯迅・革命・歴史——丸山昇現代中国文学論集』、王俊文訳、北京：北京大学出版社、2005年、330頁。
- [23] モラエス（1854-1929）、ポルトガル人。1898年に日本へ移住し、ポルトガル神戸総領事を務めた。1929年、徳島で逝去。著作に『極東遊記』『大日本』『お茶（茶の湯）』『日本通信』などがある。
- [24] 魯迅『350801致増田渉』、『魯迅全集』第14巻、北京：人民文学出版社、2005年、第367頁。
- [25] 嚴紹盪『日本中国学史稿』、340頁。
- [26] 丸山昇は、歴史的視野の中で『北京週報』、『満蒙』および『上海日日新聞』における魯迅伝播研究の成果を取り込んでいる。張杰も同様に、『北京週報』と『満蒙』に見られる魯迅伝播の研究成果を整理したが、いずれも旧満洲地域における日本人の魯迅研究には言及していない。
- [27] 戈宝権「魯迅の著作在日本」、『魯迅研究』(1)、上海：上海文芸出版社、1980年、93-94頁。
- [28] 魯迅『魯迅全集』第15巻、北京：人民文学出版社、2005年版、457-492頁。
- [29] 謝朝坤「魯迅在偽満洲国の伝播、接受と影響」、『名作欣賞』、2016年第26期。
- [30] 桑兵『交流与对抗——近代中日関係史論』、桂林：広西師範大学出版社、2015年、151頁。

- [31] 丸山昇『魯迅・革命・歴史——丸山昇現代中国文学論集』, 王俊文訳, 北京: 北京大学出版社, 2005年, 331頁。
- [32] 飯倉照平「有関〈北京週報〉上の中国現代文学紹介」, 『魯迅研究資料』(8), 吳憲・王慧敏訳, 天津: 天津人民出版社, 1981年, 314-315頁。
- [33] 尾崎文昭・薛羽「戦後日本魯迅研究——尾崎文昭教授訪談録」, 『現代中文学刊』, 2011年第2期。
- [34] 薛綏之主編『魯迅生平史料匯編』第2輯, 天津: 天津人民出版社, 1982年, 107頁。を参照。
- [35] 吳俊「阿部兼也教授其人其事」, 『作家』, 1995年第6期。
- [36] 秦弓「一位研究魯迅的日本学者——懷念丸尾常喜先生」, 『中国社会科学院院報』, 2009年6月4日。
- [37] 林房雄は1920年代, 日本プロレタリア文学運動の重要な一員であったが, 1930年に逮捕され, 1933年に「転向」声明を発表した。その後は日本主義的・国家主義的立場の論客として活動し, 戦後も日本の軍国主義を思想的に擁護する立場を一定程度維持した。
- [38] 藤井省三「魯迅在日文世界」, 王曉白訳, 『日本魯迅研究精選集』, 北京: 中央編訳出版社, 2016年, 6頁。
- [39] 丸山昇『魯迅・革命・歴史——丸山昇現代中国文学論集』, 王俊文訳, 北京: 北京大学出版社, 2005年, 185-213頁。
- [40] 京都学派については諸説存在するが, ここで言及するのは主として京都帝国大学の東洋史学系京都学派を指すものであり, 同大学の哲学系京都学派を意味するものではない。また, 梅原猛が提唱した「新京都学派」とも異なる。劉正『京都学派』, 北京: 中華書局, 2009年, 27-41頁を参照。
- [41] 李慶『日本漢学史』第1部, 上海: 上海人民出版社, 398頁。
- [42] 李碩「青木正児与五四新文学の関聯——以「将胡適漩在中心的文学革命」」, 『魯迅研究月刊』, 2018年第2期。
- [43] 梁容若『現代日本漢学研究概観』, 台北: 芸文印書館, 1972年, 6頁。
- [44] 尾崎文昭・薛羽「戦後日本魯迅研究——尾崎文昭教授訪談録」, 『現代中文学刊』, 2011年第2期。
- [45] 嚴紹璽『日本中国学史稿』, 296, 314頁。
- [46] 竹内好『近代的超克』, 李冬木・趙京華・孫歌訳, 北京: 生活・読書・新知三聯書店, 2005年, 174頁。
- [47] 倉石武四郎『日本中国学之発展』, 杜軼文訳, 北京: 北京大学出版社, 2013年, 202頁。
- [48] 吳俊「阿部兼也教授其人其事」, 『作家』, 1995年第6期。
- [49] 嚴紹璽『日本中国学史稿』, 336頁。
- [50] 李慶の『日本漢学史』は, 学派の変遷に基づき, この期間を日本漢学の成熟期と位置づけている。筆者は李慶の見解に賛同する。この時期, 日本の伝統学派はすでに近代への転換を果たし, 注目すべき中国研究の大家や著作が現れていた。
- [51] 梁容若『現代日本漢学研究概観』, 台北: 芸文印書館, 1972年, 2頁。

訳注

- 1) 青木正児 1920. 「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」, 『支那学』第1巻第1～3号所収。
- 2) 丸山昇 1986. 「日本における魯迅」, 伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史』, 汲古書院, 413頁を参照。
- 3) 青木正児 1920. 「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」, 『支那学』第1巻第2号, 43頁を参照。
- 4) 青木正児 1920. 「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」, 『支那学』第1巻第3号, 59頁を参照。
- 5) 伊藤虎丸 1975. 『魯迅と終末論——近代リアリズムの成立』, 龍溪書舎。
- 6) 伊藤虎丸 1975. 『魯迅と終末論——近代リアリズムの成立』, 龍溪書舎, 243-362頁を参照。
- 7) 山田敏三 1977. 『魯迅の世界』, 大修館書店, 273-286頁を参照。
- 8) 丸山昇 1986. 「日本における魯迅」, 伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史』, 汲古書院, 411-457頁を参照。
- 9) 丸山昇 1986. 「日本における魯迅」, 伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史』, 汲古書院, 428頁を参照。
- 10) 飯倉照平 1967. 「『北京週報』誌上での中国現代文学の紹介について」, 『大安』第67巻第4号。
- 11) 阿部兼也 1985. 「魯迅仙台時代の模索——思想化されなかった『退化』意識の払拭」, 『東北大学教養部紀要』, 第43号。
- 12) 相浦晃 1959. 「魯迅の小説の一側面——主として作品「薬」について」, 『中國文學報』通号10, 京都大學文學部中國語學中國文學研究室編。
- 13) 丸尾常喜 1993. 『魯迅——「人」と「鬼」の葛藤』, 岩波書店。
- 14) 白鳥庫吉は1909年, 『東洋時報』第131号に「支那古伝説の研究」を發表し, 漢学界に大きな衝撃を与えた。この論文において白鳥は, 「余輩は堯・舜・禹三王の史的實在を疑はざるを得ず」と述べ, 堯は天, 舜は人, 禹は地を司る存在であり, 伝説の創作者は天地人三才説の思想を念頭に置いてこれを構成したものであると論じている。
- 15) 竹内好 1983. 『近代の超克』, 筑摩書房, 239頁を参照。
- 16) 倉石武四郎 2007. 『倉石武四郎講義 本邦における支那学の発達』, 汲古書院, 93頁を参照。